

エコール・ド・パリから 若手の育成まで

母方の祖父は絵が上手で画家になるのが夢でした。けれども財閥の大家頭だった曾祖父が敷いたレールを歩まなくてはならず、夢は果たせませんでした。東大の経済学部卒業後、世界旅行でパリに立ち寄った際に大好きな画家たちの絵をたくさん買っています。名匠とされる画家たちがまだ若かった時代ですから、値段はそれほど高くはなかったはず。戦後の混乱でほとんどを手放しましたが、生涯、芸術を愛してやまなかった祖父母でした。パリには今ももちろんギャラリーがたくさんあります。アートが好きなら美術館だけで

なくギャラリー巡りもおすすめです。それぞれに個性がある中から自分と感性が合うギャラリーが見つければ、大人の旅ならではのパリの楽しみがまたひとつ増えるのではないかと思います。今回の旅では1969年に日本で唯一西洋絵画の名匠を扱う画廊として誕生した「ギャラリーためなが」のパリの画廊を訪ねました。爲永ファミリーとは家族ぐるみのおつきあいですが、現在二代目として跡を継がれ、世界を舞台に活躍されている清嗣さんにアートのこと、そしてパリの魅力をうかがいました。



エリゼ宮近く、大使館や老舗画廊も多いエリアにある「ギャラリーためなが」。入って最初のコーナーで、ピュッフェ、ヴァン・ドングンの作品に迎えられました。



パリとアート

ギャラリーためなが
フランス
Galerie Taménaga France

18 avenue Matignon 75008 Paris
☎ 01 42 66 61 94
🕒 11:00~13:00、14:00~19:00
🗓 日曜、祝日

スペイン人アーティスト、ロレンツォ・フェルナンデスの作品と。写真のように見えますがすべて手で描かれた油彩画。2004年以來、爲永氏が育ててきたアーティストの一人です。

ワンピース ¥38,000/ハウス オブ ロータス (ハウス オブ ロータス 青山店)、ピアス、バッグ、パンプス/スタイリスト私物



ギャラリー
ためなが
爲永清嗣

そういうものを紹介したほうが良いという考えでした。また、同時代の作家たちを育てていかなかったという気持ち。それは今でも続いていることです。

かれん マリー・ローランサンなどもそうですか？

爲永 そうですね。

かれん 日本で大ブームになりましたよね。子供ながらに覚えていたところで、今、日本では美術展が大変な動員数を記録したりするようになりましたが、日本人とフランス人としてアートの親しみ方に違いを感じられますか？

爲永 日本人は知識、あるいは教養をつけるために美術館に行く傾向があるのに対して、フランス人はむしろ生活の中にアートを取り入れていくことに長けていると思いますね。

かれん 外国のお宅ではだいたい玄関、リビング、寝室には絵画がありますね。

爲永 日本には長い歴史と文化があり、教養豊かな人も多い。ところが立派な家を建てる、ホテルを模したモデルルームみたいで個性が無いお宅が多いのが残念。壁に絵を飾ることで部屋が一変するんです。他人にどう思われるかは別として、その人の個性をもっと表現できれば

爲永 父がよく言っていたのは、当時印象派はもう十分紹介されているけれども、その次の時代のものは美術館に入ってもいいような作品がまだまだ市場で手に入るんだよ、と。

かれん 藤田嗣治もそうでした？
爲永 父が1950年代にパリに暮らしていたときから親交があります。当時、エコール・ド・パリの名品が世に出てきていましたが、日本でそれを扱っているところはまだない。

もある。本当に良い作品とは見るほどに惹きつけられていつまでも飽きない作品のこと。それは自分で判断すること。日本人の多くが食事やワインにはうるさく、コンサートに熱心に足を運び、味覚や聴覚で楽しむ基盤ができているわりに、視覚という点で本当の楽しみ方を知っている人が少ないと思います。いわゆる「豊かな生活」を過ごすためには毎日目にする空間を視覚的にも楽しむということを加えて初めて成り立つ気がします。同じ長さの時間を生きる上で「見る」という楽しみを知らずにいるのはもったいないですよ。

かれん 美術館と違って、ギャラリーは敷居が高いように感じる方が多いと思うのです。例えばいきなり「ギャラリーためなが」を訪れる人は歓迎されますか？

爲永 大歓迎。一人でも多くの人が来てくれて、それぞれ自分の目で見たいってほしいと思います。そうでなくてはいけません。そのためにならぬ。

かれん 初めて入るのは緊張しちゃうかもしれないけれど、ある意味無料でシャガールやらピュッフェが見られる。しかも美術館では見られないものが見られるというのは、かなり贅沢なことですよ。

爲永 画廊と美術館の違いは、買うと思えば買えることなのです。
かれん その通りですね。結婚の記念に、とか夢を与えてくれますものね。最後に、一年のうち半分はパリに暮らしておられる爲永さんにとって、パリの魅力とはなんでしょう？

爲永 美術展にしてもコンサートやバレエにしても、大々的なものから気軽に楽しめるものまで豊富で質が高い。そして会食の時などの話の内容がとても文化的。新刊本や映画も含めて、みなさん本当によく見ているし、それについて話したいという空気ね。

かれん 確かに。批評や議論をするのが大好きですよ。

爲永 その層の厚みが圧倒的だと感じますね。私から見ると途中で疲れちゃうかなと思うような映画でもきちんと見て、その人なりの意見を持つておられます。日本のレストランなどがおいしい理由は日本人が味にうるさいから、まずい店は消えてお店が切磋琢磨してレベルが上がっていく。同じように、映画もアートもそれに堪えうるレベルを維持しないとイケない。文化的な香りというのはそんなふう醸成される気がしますが、それがパリの魅力なのだと思いますね。



爲永清嗣さん

「ギャラリーためなが」代表。東京生まれ。スイスの中学、アメリカの高校、慶應義塾大学を卒業後、日本興業銀行入行。'91年退行後渡仏し、家業に参画。現在は日本とパリ半々ほどの割合で活躍。一男二女の父。

良いのにと感じます。「趣味が良い、悪い」と感じるのも人の主観であって、正しいか間違いかはありません。それぞれの人が住む空間を自分なりのセンスで楽しんでほしいと感じます。パリで美術館に行っても、『モナリザ』だけを遠くから確認する人が多い中で、ちょっと横に目を向ければ他に素晴らしい作品が間近で取り占めできるので誰も見えていなかったりする。絵を見る感性はあくまでも個人の主観です。「皆は良い良い」と言うけれど、私は嫌い」とはつきり言える日本人は少ないですね。

かれん 確かに外国人はその塊ですね、必ず「私は」と言う。日本人はそれをばやかしたと思う方が大半。**爲永** 自分の軸をしっかりと持っている人はアートは楽しめます。例えば家やオフィスに絵を掛けてみる。そうすると、最初は気が付かなかったのに、段々と深い部分が見えてくる作品がある。一方で最初はインパクトがあったけれど、毎日目にしていくとすぐ飽きてしまう薄っぺらの作品

自分の好きと嫌いの軸を持てば
アートはもっとと楽しめます